

## （角鹿の塩 呪いをかけ忘れた塩）

### 角鹿の塩：呪われなかった唯一の塩

#### 概要

何世紀もの間、若狭湾に沿った角鹿地域（現在の敦賀市）は、良質な塩の産地として知られていました。さらに、ある時には、天皇が食べても安全な唯一の塩と見なされていました。古代の物語によると、首都での政治的陰謀と報われない愛により、復讐に燃える大臣が日本のすべての塩に呪いをかけました。幸いなことに、彼が呪いを唱えていた時、角鹿に言及するのを忘れたので、そこで生産された塩は呪いを免れたとされ、それによって角鹿は宮廷や首都の貴族にとってさらに価値のある塩の供給源になりました。

#### もっと詳しく知る

8世紀の日本の歴史の年代記である日本書紀によると、有力な高位の大臣であった平群真鳥（498年没）は、伝説的な第24代天皇である仁賢天皇（449年～498年）の死後、権力を奪い、国を支配しようとしました。真鳥は、亡き天皇の幼い息子である将来の武烈天皇（489年～507年）の代理で行動していると主張し、この相続人のために委託された壮大な宮殿に住んでいました。

武烈は成長すると、真鳥の息子である平群鮪の秘密の恋人であった影姫に求愛を始めました。影姫が皇子の誘いを断るとどうなるかを恐れ、しつこく会うことを了承した時、真鳥は武烈へ馬を提供するよう命じられた。大臣は命令を受け入れ、あざけるように「誰のためにこの宮殿の馬を飼っているのか？もちろん、彼の命令には従わなければならない」と言ったが、故意に馬を遅らせました。

その妨害にもかかわらず、武烈は最終的に詩の朗読会で影姫に近づきました。鮪は邪魔をしようとしたが、脇へ追いやられました。この二人の若い男たちは、比喻の中に脅迫と侮辱を隠した詩を交換しました。鮪が身を引くことを拒否したとき、武烈は次の詩歌を使って影姫に直接愛を宣言したが、鮪は自分の愛こそが影姫が必要とする唯一の愛であると返答しました。

武烈はその時、鮪と影姫がすでに恋人同士であることに気づきました。馬の一件を思い出し、無礼に激怒した武烈は、鮪を処刑し、真鳥を殺すよう手配しました。恨みでいっぱいとなった真鳥は、死ぬ前の最後の復讐として、最終的に呪われた塩が天皇の食卓に届くことを期待して海の全ての塩を呪いました。彼は数えきれないほどの地名を挙げましたが、どうやら角鹿地域に言及することを忘れていたようで、そのため、天皇が食しても安全なのは角鹿から来た塩だけだと信じられていました。

古代の物語が示唆するその通りに出来事が起こった可能性は低いですが、この物語は角鹿の塩が高く評価された理由について興味深い説明を提供しています。物語はまた、若狭湾と首都とのつながりを浮き彫りにし、宮廷や貴族の間での出来事がどのようにして、比較的小さく遠く離れた沿岸地域からの商品の評判と消費に影響を与えた可能性があるかを示しています。

### **展示品**

展示されているのは、角鹿の製塩にまつわる工芸品や複製品などです。注目すべきアイテムには、松原製塩遺跡で発見された古代の陶器や、角鹿から平城京（現在の奈良）の首都への塩の供給を示した木製の荷札の内の 1 つを複製したものなどがあります。角鹿の塩の物語を伝える日本書紀の 1 ページを拡大した複製と、松原遺跡の写真が情報パネルの中に見ることができます。